介護の定義

介護とCareと世話

Ⅰ 介護とは
1　介護の語義

「高齢者や病人などを介抱し、日常生活を助けること」
『広辞苑』 第六版　岩波書店

「病人や老人を、日常生活の身体的困難などに対して補助したり、看護すること」
『国語大辞典』 小学館

「介」

①なかだちをする、間に入る／媒介、介入
②たすける／介助、介抱
③よる、たよる、気にかける
④かたい、かたく自己を守る／介立、介石
⑤こうら、かいがら／介殻、魚介
⑥よろい／介冑

「護（まもる）」 →「目（ま）守（も）る」

①目を離さないで、じっと見る、見守る
②こっそりと様子を見る
③おかされたり、奪われたりしないようにする、保護する
④神仏や土地を守護する
⑤大切なものとして扱う
⑥決まり、規則、命令を遵守する

２　介護の定義

1974（昭和49）年 『社会福祉辞典』 誠心書房

「・・・・食事、排便、寝起きなど、起居動作の手助けを『介助』といい、疾病や障害などで日常生活に支障がある場合、介助や身の回りの世話（炊事、買い物、洗濯、掃除などを含む）をすることを『介護』という。・・・・」

1988（昭和63）年　日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会施設協議会連合会　社会福祉実習のあり方研究会

「老齢者や心身の障害による、日常生活を営む上で困難な状態にある個人を対象とする。専門的な対人援助を基盤に、身体的、精神的、社会的に健康な生活の確保と成長、発達をめざし、利用者が満足できる生活の自立をはかることを目的とする」

2000（平成12）年　『社会福祉学小辞典』 ミネルバ書房

「広くは高齢者や障害者などを世話（ケア）することを指すが、狭義には高齢者や障害者などへの専門的なケアを提供することを指す」

「社会福祉分野の専門的な教育を受けた者が提供するサービスを介護という手段を用いて達成する）という意味をこめて介護福祉という言葉で表現された」

「（現時点では）介護と介護福祉の区別は非常に不明瞭で、社会的に承認されるまでにいたっていない」

Ⅰ介護とは
３　介護福祉の定義

2014（平成26）年　『介護福祉学事典』 ミネルバ書房

・「介護とは、日常生活行為を成立させるための援助行為であり、実践行為である」

・「介護福祉とは、法的に規定された活動であり、日常生活の営みを支援する実践過程において、偶発的な行為ではなく、人権尊重の思想を根幹にすえ、誰のために、何を実現するためのものか、という理念的かつ指向性のある働きかけであり、専門性に裏づけられた実践」

Ⅰ介護とは
4法律上の介護の定義①

- 1929（昭和4）年　軍人恩給
- 1949（昭和24）年　身体障害者福祉法
- 1961（昭和36）年　児童扶養手当法
- 1963（昭和38）年　老人福祉法

何れも障害の程度を区分する用語として使用された

- 1986（昭和61）年　老人保健法（法106号改正）

介護職を配置することが設置条件であることを示すために使用された

Ⅰ介護とは
4法律上の介護の定義②

- 1987（昭和62）年

「社会福祉士及び介護福祉士法」

「　この法律において「介護福祉士」とは、第42条第1項の登録を受け、介護福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもつて、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき入浴、排せつ、食事その他の介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うこと（以下「介護等」という。）を業とする者をいう。」

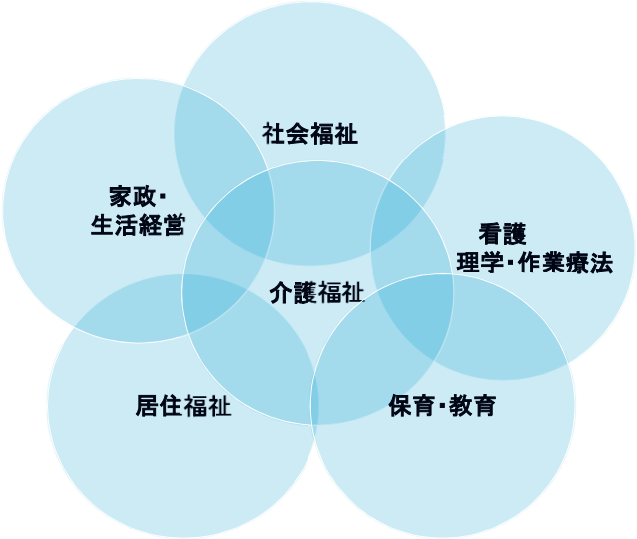
※職業としての介護福祉を国家資格として位置づけた
※対象を要介護者とその家族とした
※内容を介護と介護に関する指導とした
※平成19年12月の一部改正では、下線の部分が「心身の状況に応じた」と改正された。

Ⅰ介護とは　５　介護福祉の内容

項目	内容
身体的生活領域	食事、排泄、入浴、睡眠、整容、着脱、移動・・・ADL
文化的生活領域	読書、学習、信仰、趣味、娯楽、レクリエーション等
社会的生活領域	交際、家族との交流、行事、仕事、外出、外泊、買い物、ボランティア活動
生活環境整備、生活経営・管理	調理、衣服の管理、住居の整理・整頓・整備、買い物、金銭管理、生活用具の工夫・・・IADL
健康観察・保持	全身観察、訴え、バイタルチェック（呼吸、脈拍、体温、血圧、身長、体重）、尿・便の観察、服薬・点眼・塗布・湿布の介助、通院介助、機能訓練介助、医療関係者との連携
相談・助言	相談援助、介護方法の指導、介護情報の提供
応急処置、ターミナルケア	観察、医療関係者への連絡、処置、家族・医療関係者との連携
管理・運営	ケアプランの立案・実施・評価、カンファレンスの開催、介護記録、関係機関・職種との連携、社会資源の利用

ADL：activities of daily living　IADL :instrumental activities of daily living

Ⅰ介護とは
７　介護福祉からみた関連分野①



Ⅰ 介護とは
7介護福祉からみた関連分野②

- 社会福祉と介護福祉

社会福祉（ソーシャルワーカー）は、社会資源や制度を開発・活用し、コミュニケーション技法や対人関係技法を通じて、利用者の自発性や意思を尊重し、社会的及び心理的側面を中心とした援助を行い、介護福祉（ケアワーカー）は、身体的・精神的障害のために、比較的保護的な援助の必要な利用者に対して、福祉機器や施設の機能を開発・活用して、主にADLやIADL面への介護技術を通じた援助を行うとともに、心理・社会的な側面へのアプローチも行う。

- 看護と介護福祉

看護は利用者の健康を重視した援助を行い、介護福祉は社会福祉の理念と利用者の社会的な生活の技法を尊重した援助を行う。

- リハビリテーションと介護福祉

リハビリテーションは①医学的、②教育的、③社会的、④職業的リハビリテーションに分類されるが、介護福祉は日常生活に関する直接的・継続的・包括的な援助であり、その中にリハビリテーションの視点・技術を導入することにより、利用者の自立と自己実現（その人が人生でなそうとしていることの援助）を図る。

Ⅰ 介護とは
7介護福祉からみた関連分野③

- 家政と介護福祉

家政学は生活の要素を①生理的生活、②作業的生活、③文化的・社会的生活の3分野で説明し、それぞれを適正に調和させ、バランスをとって個人・家族の自己実現をすることを家庭生活のねらいとしている。介護福祉では、利用者のライフスタイルを尊重した3要素の充実・安泰を図ることをねらいとしている。

- 保育と介護福祉

介護福祉を広義の概念と捉えると、介護は高齢者や障害者のみならず、児童も介護の対象者に含まれる。しかし、狭義に捉えた場合は、生活技術をこれから習得する児童に対しては、保育・教育・養護があてはまり、いったんは生活技術を獲得した後に失ったり、支障をきたしている者に対しては、介護福祉があてはまることになる。

■居住福祉と介護福祉

居住福祉は、住居、居住地、地域、都市、農山漁村、国土などの居住環境を生存・生活・福祉の基礎であり、基本的人権と捉えている。介護福祉は生活の継続性、自己決定を基盤に人的・物理的環境整備を通じた利用者の「居場所づくり」を重視する。

生活領域と対応職種

生活領域　職種	医師	看護師	栄養士	言語聴覚士	理学療法士	作業療法士	社会福祉			住環境コーディネーター（在宅）	一級建築士（在宅）
							介護福祉士	社会福祉士	介護支援専門員		
身体的健康	■	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○
心理的健康（認知症症状、うつ等の軽減）	■	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○
日常生活動作　リハビリテーション	○	○	○	●	●	●	○	○	●	○	○
ADL	○	○	○	●	●	●	●	○	●	○	○
IADL	○	○	○	●	●	●	●	○	●	○	○
生活態度、生活習慣、文化的背景	○	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○
社会関係（役割意識、文化活動、対人関係、社会参加）	○	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○
経済状況	○	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○
住生活環境（プライバシー、自立を妨げる要因）	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●

Ⅰ　介護とは　8まとめ①

1　狭義の介護

ADL、IADLの介護

2　中範囲の介護

・「医行為」ではないとされる医療的行為

看護と重なる領域（平成17年7月　厚労省通知）

「医療的ケア（喀痰吸引・経管栄養）」

（平成23年「社会福祉士及び介護福祉士法の一部を改正する法律」

・生活リハビリ

理学療法士と重なる領域

3　広義の介護（介護福祉）

・生活機能が低下したり、不全となった本人や家族が自立した生活ができるようにするための支援

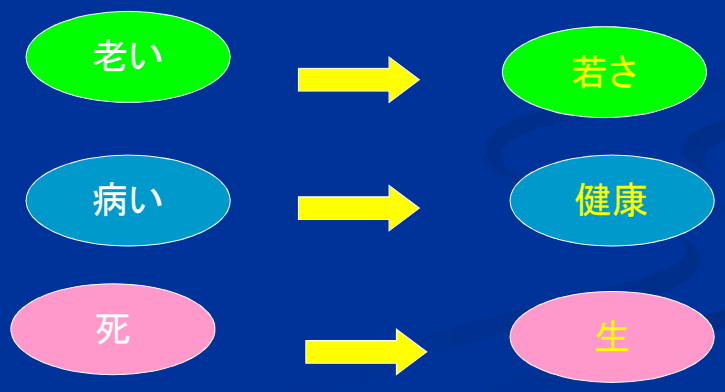
社会福祉と重なる領域

Ⅰ 介護とは
8まとめ②

- 医療は、治療を行う。
- 看護は、療養上の支援を行う。
- 社会福祉は、個人と社会システムへのはたらきかけを行い、個人と環境との相互作用（バランス）を支援する
- 介護福祉は、個人と社会環境の相互作用を視野に入れながら、ADL、IADLの支援を主体としつつ、心理的・社会的な支援も行う。

Ⅱ Careとは
1　キュア（Cure）からケア（care）へ①

- キュア（cure）・・・・治療のアプローチ



Ⅱ Careとは

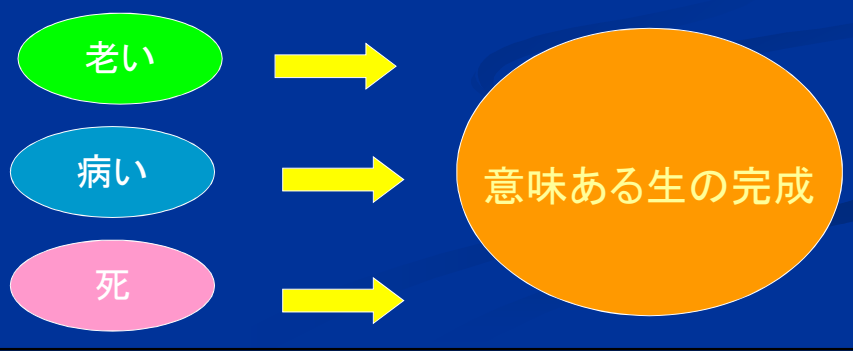
1　キュア（Cure）からケア（care）へ②

- キュア（cure）とは
  〈病気・病人〉を直す、治す、治療する
  〈悪癖など〉を矯正する
- キュア（cure）できないということは？
- キュア（cure）からみたケア（care）とは
  ①科学的・技術的治療が役に立たなくなること
  ②医学的治療技術が「老い・病い・死」という人間の有限性に敗北すること
  ③「医者もサジを投げる」こと、医師の手を離れること

Ⅱ Careとは

1　キュア（Cure）からケア（care）へ③

- ケア（care）・・・・介護のアプローチ
  「共に老いるべき者」、「共に病むべき者」、「共に死すべき者」としての人間の有限性を共有する。



Ⅱ Careとは
1　キュア（Cure）からケア（care）へ④

	キュア概念	ケア概念
認識の基点	「生」	「老い・病い・死」
目的	生の原状回復	意味ある生の完成
対象の認識方法	客観的認識 細分化（臓器・細胞）	全体的認識
援助関係	教示的、指導的	共感的・支持的
関係様態	上下関係、一方的関係 （知識・技術の格差大）	並列関係・相互作用関係 （人間的成長の 学びと発見）

村田久行「ケアの思想と対人援助」川島書店　1994　55頁

Ⅱ Careとは2　careの語義①

- care
  - ・名詞・・・心配、気がかり、注意、気配り、心遣い、保護、介護
  - ・動詞・・・気にかける、心配する、関心を持つ
  - ・語源は、ギリシャ語のカーラーで、『苦しみを共にする』という意味
- care　for

  世話をする、面倒を見る、大事にする
- take care of

  世話をする、引き受ける、大事にする、処理する

※ランダムハウス英和大辞典（第2版）

Ⅱ Careとは　2careの語義②
Care ≠ 世話

- 「世話」の語義

「世間のうわさ」、「人のために尽力すること」、「めんどうをみること」、「通俗の言葉」、「日常的なこと」

・「世話になる」・・・他人の尽力を受ける

・「世話が焼ける」・・・他人の手助けが必要で手数がかかること

- 「めんどう」

「物事をするのが煩わしい」、「手数のかかること」

「めんどう」が転じて「世話」や「厄介」を示すようになった。

→　ケアと「世話」を同じ意味で使うのはふさわしくない。

Ⅱ Careとは3　careの基本特性

1. 人に関心を向けること
2. 関心の向け方は、「気がかり」、「心配」等、他者にこころを痛めるかたちである
3. ただ気にかけたり、心配するだけでなく、その気持ちを行為によって表現すること
4. これらのことが自発的に動機づけられていること

→ わが国において、介護を説明する時に、「世話」という用語が減り、「ケア」という用語が増えることは、「してあげる」介護や「負担」としての介護概念が後退し、自発的な動機（倫理）に基づいた介護概念が浸透していくプロセスでもあるのではないだろうか。

Ⅰ　Careとは
４　ケアにおける相互交流性

「モリー先生との火曜日」

ミッチはモリー先生の体をケアし、モリー先生は、ミッチの心をケアした。

「多くの人が無意味な人生を抱えて歩き回っている。自分では大事なことのように思ってあれこれ忙しげに立ち働いているけど、実は半分寝ているようなものだ。まちがったものを追いかけているからそうなる。人生に意味を与える道は、人を愛すること、自分の周囲の社会のために尽くすこと、自分に意味を与えてくれるものを創り出すこと」

ミッチ・アルボム 「モリー先生との火曜日」
日本放送出版会　1998年　48頁

１　モリー先生との再会を通じたミッチの経験

- 「仕事、金、野心　－　しかし本当に欲しいものは何だろうか」、「ミッチは何かから逃げている」という問い。
- 大学時代の先生が今度は人生のコーチになった。
- 忙しすぎる仕事、本当の出会いから逃げるような人間関係、壊れかけた恋人との絆を見つめ直す機会を与えられた。
- 今まで固執していたものが儚いものであるということに気づき、今まで見落としていた家族や友人などの愛する人たちとの絆の大切さを学んだ。
- ピアノや泣くこと、触れ合うこと、愛を素直に表すことなど、忙しい日常の中で忘れていたことを思い出した。
- 携帯電話に夢中で、現実に向き合わない姿勢から、現実に対して開かれ、「今、ここで、この人との関わり」を大切にするようになった。→ジャニーとの関係が変わった。

２　モリー先生にとってのミッチの存在

- かつては、お気に入りの教え子であり、バティ（相棒）だった。再会後は、それだけでなく、「かいがいしく」介護をする人、生きる支え、心に触れる存在、愛する友、そしてかけがえのない存在になった。
- 火曜日に必ず来てくれるという信頼できる存在になった。
- ミッチに死と向き合うことを教えることで、モリー先生自身も自分の死と向き合っていったのではないか。
- 死や本当の自分自身に向かい合うというモリーの姿勢をミッチは引き継いだ。

→ 最後の受講生。

→ モリー先生の中核的なアイデンティティーを最後の時間まで支えた。

→ 誰かをケアすることによってもたらされる人間としての尊厳を支えた。

３　モリー先生にとってのケア

- 恥じるべきことではなく、人はひとりでは生きていけない。
- 赤ちゃんと同じような依存。人生の最後における依存。
- 人は人生の最初と最後の時期に人に依存しているが、その間も人に支えられている。
- 人は生まれながらにして、人に触れられ、抱きしめられ、愛される。ケアも同じように人に触れられ、見守られ、愛される。
- 介護の中で触れられることによって、生を実感するもの。
- 人に自分をゆだね、なされるままになる。しかし、その経験の中にも新しい教えがある。
- ケアされることを恥じるのではなく、ケアしてもらい、その人に感謝していれば、相手の苦労も少なくなる。

4　モリー先生との出会いによる、ケアに対するミッチの姿勢の変化

- はじめは戸惑っていたが、モリーに対する愛が、苦しみから救いたいという思いになり、心のこもった介護になっていった。
- もっとモリー先生と触れあいたいという思いが介護というかたちで表れた。
- モリーの欲している介護がわるようになり、相手のことを考えて動けるようになった。
- 手を出しにくかった介護が支え合いになり、何気ない気配りに表れるようになった。
- 次第に、身体が自然に動いているように感じた。

→　介護は最も基本的な愛の実践のひとつである。

- 介護することでその人の生活を助けることができたり、危険な状況や病状を和らげることがわかるようになった。

→　介護が行えることは援助者としての自由度を高める。

5　モリー先生とミッチの関わりから学ぶケアの相互関係性

- 人は人と関わり成長していく。人と関わらないで時間に追われている人生では何も学べない。
- ミッチに支えられながら死に向かうモリー先生とモリー先生からの教えによって本当の生を取り戻すミッチ、このふたつは正反対でありながら均衡しており、善い影響を与え合いながら相互関係によって結びついていた。
- 自分と向き合うことは相手と向き会うことにつながり、それによって、周りとの関係も変わってくる。
- 相手の望みが自分の望みとなり、相手の幸せが自分の幸せに感じるという関係が創られていた。
- 「人生に悔いはないか？」と自分の肩の鳥に聞くという話しは、援助者や環境に左右される。「人生に悔いはない」と言ってもらえるような援助はとても素晴らしい。
- 支え合う関係は、偶然ではない。モリーにとってはミッチが、ミッチにとってはモリーである必然性があった。

→　高齢者の英知に触れるということは、若い時代に人生の本質的な意味に気づくということ。

→　本当の意味で理解するとは、自分の人生を通じて応えるということ。

ソーシャルワーカーの3つの型からみたモリーとミッチの相互交流

	治療（therapy）	媒介（mediate）	代弁（advocacy）
モリー	・ミッチの心を癒し、精神的な導き手となった。	・ミッチが自分自身を見つめる人格的な鏡となった。 ・ジャニーとの関係修復の橋渡しをした。	・恋人や会社の上司に対して、ミッチが人生に真摯に向き合い、苦悩していることを代弁した。
ミッチ	・モリーの身体をケアした。 ・モリーに寄り添い、人生の棚卸しの聴き手となった。	・モリーの「意味ある生の完成」への橋渡しをした。	・モリーの叡智を広く世界に発信する代弁者となった。

対話による相互関係

- 人は誰かに大切にされ、関心を持って、傾聴されると・・・

  ⇒自分自身を大切にし、自分の心の声に耳を傾けるようになる。

- 自己に向かっていく人に傾聴し、自己洞察や自己理解に触れて、深く共感することを経験すると・・・

  ⇒自分自身も見せかけのものから離れて、自己に向かうようになる。

喪失と再生１
（モリー先生）

- ALSは、モリー先生にとって、最悪の喪失体験だったが、その出来事を通じて、かつての教え子であるミッチとの再会があり、結果的にモリー先生のメッセージが世界に向けて発信され、広がった。このことは、モリー先生の人生において最高の実りとなった。

喪失と再生２
（ミッチ）

- モリー先生との再会が人生のターニングポイントとなり、仕事、野心、お金に振り回される生活を空しいと感じるようになり、愛やコミュニティーへの貢献を大切に思うようになった。
- モリー先生との出会いは、本の出版や映画化に結びついたが、そのような実りにつながるために、必要だったことのひとつは、それ以前の上昇的指向、勤勉さ、目標を達成する能力である。
- →的外れなゴールを達成するために習得した能力でも、より建設的な目標実現のために、生かすことができる。

喪失と再生
（個と全体）

波と海の喩え話

- 波は個人の人生、海は世界。
- 個人の固有の物語が全体である世界の歴史を創っている。
- 個人の意味ある人生の物語を完成するプロセスが、世界の歴史に意味を与えている。

老年期の統合と成人期の個性化

- 老年期の統合（E. H. エリクソン）

完結を迎えようとしている人生を目のあたりにし、残された人生を生き抜くための英知を統合し、無限の歴史的連続性の中で自己のライフストーリーを受け入れる。

- 成人期の個性化過程（C. G. ユング）

個人に内在する可能性（元型）を自覚して、自己の実現を高次の全体性へ結びつける。

成人前期：外的現実への加入（initiation）
成人後期：本質への振り返りと普遍的全体への関係づけ